

リレー随筆

『ドクターコトーの研修医生活』

鹿児島県立大島病院 循環器内科 古藤 聡一

ご挨拶

「研修医のコトーです。」

PHSでのコールが鳴るたびに初期研修医としての癖が抜けなく、3年目としての自覚が足りていない今日この頃です。

鹿児島県本土から遠く離れた奄美大島で医師3年目の生活を始めております。本来であれば循環器内科の同期たちと、楽しい華の大学病院生活が待っていたはずなのですが、色々と遠回りしながら楽しんでいきたいと思っています。

大学は栃木県にある自治医科大学を卒業しました。前回、前々回を担当した彼らは大学の同級生でかれこれ10年来の関係になります。離れた土地で楽しく過ごすことができていたのも彼らのおかげです。この度、そんな彼らからバトンを頂き執筆させていただくことになりました。これまでのリレー随筆を拝見して、なにも書けないまま締め切りがあと3日と迫ってしまったので、県立大島病院での研修医生活について振り返りたいと思います。拙い文章で大変こころ苦しいですが、最後までお付き合いください。

研修医生活

小さい頃から『将来の夢はなに』と色々な場面で聞かれることが多かった。色んな出来事があり、幼い頃から医師を目指していた。中学・高校時代は『「Dr.コトーの診療所」のような医師になる』と、自分の名前が古藤(コトー)であったため半分冗談のようなつ

もりで口にしていた。自治医科大学を卒業し卒業後地域医療に従事する自分にとって、今となり言霊の力を痛感している。医大生になって、本物の「Dr.コトー」の偉大さを知ってからは、自分から冗談のように使うことはなくなった(それまでは飲み会の自己紹介でキャッチーだったため頻用していた)。そんな自分もなんとか医師国家試験に合格し、初期研修医となることができた。

初期研修医、皆さんはどういった気持ちで望んだらうか。期待や不安を抱きながら多くの人がワクワクしていたのではないだろうか。私はかつてない不安に苛まれていた。一緒にの時期に提出したはずの医籍登録が全く完了しないのである。同じ日に登録しているはずなのに、一カ月たってもまだ登録されていない。「はじめまして、担当医のコトーです」入院患者に自分は嘘をついているような気分で過ごしたのを覚えている。そんなこんなで医籍登録もされ、自信を持って医師と名乗り始めてから、自分がいかに無知なのか思い知らされた。最初にお世話になった指導医には、「先生、机の下ってなんですか?」「なんで手紙の最後に拝むんですか?」「(指導医:モニター心電図見てきてー) 見てきました! 10分見てきたけど不整脈でなかったです!(モニターの履歴をみてきなさい!!)」今となっては大変恥ずかしい思い出である。そんなくだらない質問にも丁寧に指導してくださった先生方には頭が上らない。

そんなスタートで始まった研修医生活だが、

2年間はとても楽しく過ごすことができた。一つに研修医の同期にかなり恵まれたと思う。見ず知らずの24歳～40歳までの幅広い年代が一斉に集められ始まった研修医生活、思い出もたくさんある。幾度となく海にくりだしたり、ダイビングライセンスは当たり前で、フィンを自前で揃え、GoProを揃え、麻雀で役を揃え、救急外来で出来る手技の足並みを揃えた2年間であった。今となっては3年目となり、初期研修医に「憧れの3年目」としてみられて大変誇らしい気持ちであるが（口を開くと素が出てきてしまい、もう5月にして舐められている）、皆同じ状況であったので安心していただきたい。

私は、県病院プログラムの一環で外病院に多く出た方であると思う。鹿児島県本土の病院はもちろんのこと、コロナ禍ではあったが、兵庫県の淡路医療センターでの研修も行うことができた。その経験は今でもかなり影響を受けている。同じ1年目でもここまで差があるのかと感じさせられた。初日に病院を訪れた時から、「この人にCV入れてー」「今日から主治医だからね」「夜間のcallは任せたよ」その時はじめて自分が医師になったんだと自覚した1カ月であった。これまでも研修医として仕事をしてきたが、責任を感じることがないままぬるま湯に浸かっていたんだなと感じた。その1カ月で出来るようになったことは少ないかもしれないが、その経験から学べたことは2年間で振り返るととても大きかったと自覚している。

その後、研修医2年目になり後輩の研修医ができ、自分のできることも増えていく。同期の研修医と鹿児島県本土へ行き、外病院での研修もおこなった。病院内の宿舎で生活していたためコードブルーも常に鳴り響いた環境であった。院内急変対応の初期対応を同期3人で行なった時には、「俺らも成長したね」

と少しずつまともな医者に近づいていることに感動したのも懐かしい。

この2年間で同期はもちろんのこと多くの人々に出会い、お世話になることができた。「あ、カッコいい」と思ってしまうような言葉であったり、姿をみてきた。別れがつらく、最後に大泣きしてしまったこともある。幸せな研修医生活が終わりに近づき、最後の研修先でまた、研修医最初の指導医にお世話になることとなった。最初と最後を指導していただくことができ、手紙もかけるようになり、「机下」も「侍史」も「幸甚」も使いこなせるようになった姿を見せることができ、優秀の美をかざれたかなと思っている。研修医最終日、記念撮影の写真とメッセージを頂き、成長したことの嬉しさと終わってしまう寂しさとでうろっと来てしまった。他にも書きたい研修医の間のEpisodeもあるが、長々としても退屈するだけであり、ここまでであとは胸にしまっておこうと思う。これまでに関わった全ての方にこの場を借りて感謝の気持ちを伝えたい。

そして今、循環器内科にも研修医が回ってきている。「心電図わかんないっす」「エコーで心臓が出てきません」そんな昔の自分をみているような気分になるが、温かい気持ちで見守っていきたい。

次号は、県立大島病院 初期研修医 山田直樹先生のご執筆です。
(編集委員会)